

# 僕の一番の味方

「天才肌でええオトコになれよ」

たったこれだけ。父から僕への最後の手紙だった。父が生きるのが辛くて逃げ出したこの世で、父が自ら死んでしまったという人生最悪な出来事を僕に背負わせて、何で僕には前向きに生きろみたいな無責任な手紙を残すのか。二年前の春からずっと、怒りなのか悲しみなのかよくわからない感情でぐちゃぐちゃだった。

「お父さんがどんな風に死んだかじゃなくて、どんな風に生きとったかを思い出してみて。」  
しばらく経ったある日、祖母が言った。

真面目で優しくて、ちょっと冗談が通じないところがあって、でも自分が冗談を言うのは好きで、自分で言って自分で大笑いしている、ちょっと変わった人だった。

僕がまだ幼い頃、友達の前の中に入って遊ぶのを嫌がって一人で居たがるのを、母が心配して父に相談したことがあった。父は、

「晴揮は天才肌やけん。天才は子どもの頃からちょっと変わっとるんよ。将来が楽しみやな。」

と笑っていた。今思い返すと、何かの度にそう言って僕に笑い掛けてくれていた。天才なわけないやん。と思いながらも、僕も悪い気はしていなかったのを覚えている。そうだった。僕はきっと、ずっと父の言葉で、父の笑顔で支えられていたんだ。だから僕の味方である大切な父を失って、すごく辛いんだ。そう実感すると、涙が止まらなかった。だけど心が少しだけ軽くなった気がする。

今も父には怒っている。父に会えないのが辛い。でも、父の言葉や笑顔を思い出すと、頑張ろうと前を向ける。頑張っている僕を、父もどこかで笑って見ているかもしれない。